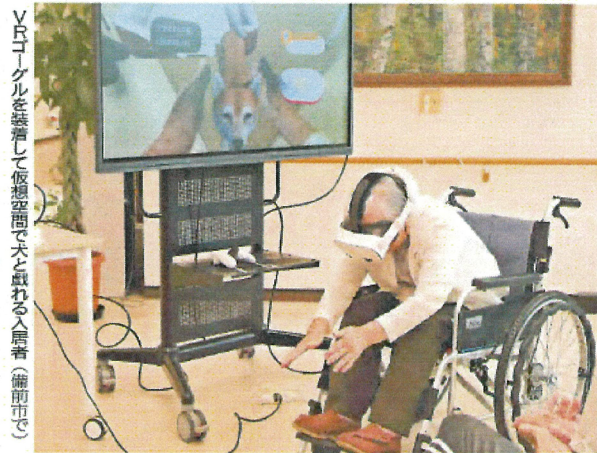


介護や福祉 VR活用

スタッフ負担減 支援の質向上

備前の施設 仮想ペット入居者に一体感



「お利口さん」「お座りなせ」で9月、VRゴーグルを装着した入居者が、仮想空間に再現されたシバ犬やボメラ・アンと触れ合っていた。

約40人が入居する同施設では、レメディ・アンド・カンパニー（東京都千代田区）が開発した「いつでもワンちゃん」を8月から本格導入し、週に1回レクリエーションを実施。体験を終えた福井慶信さん(87)は「ボールを持って帰ってきてくれるのがうれしい」と笑顔を見せた。

施設の担当スタッフ尾形駿介さん(29)は「入居者の一体感が生まれ、体験直後だけでなく『昔、うい犬を飼っていたんだよね』といった普段の話題にもつながった」と話し、コミュニケーションの深まりを実感しているという。

さらに、グラウンドゴルフ

介護や福祉の現場で、VR（仮想現実）を活用した新たな支援の取り組みが広がっている。仮想空間でペットと触れ合うことで施設入居者のコミュニケーションを豊かにするだけでなく、スタッフの負担軽減や支援の質の向上にも役立てようとしている。

「お利口さん」「お座りなせ」で9月、VRゴーグルを装着した入居者が、仮想空間に再現されたシバ犬やボメラ・アンと触れ合っていた。

約40人が入居する同施設では、レメディ・アンド・カンパニー（東京都千代田区）が開発した「いつでもワンちゃん」を8月から本格導入し、週に1回レクリエーションを実施。体験を終えた福井慶信さん(87)は「ボールを持って帰ってきてくれるのがうれしい」と笑顔を見せた。

施設の担当スタッフ尾形駿介さん(29)は「入居者の一体感が生まれ、体験直後だけでなく『昔、うい犬を飼っていたんだよね』といった普段の話題にもつながった」と話し、コミュニケーションの深まりを実感しているという。

さらに、グラウンドゴルフ

感情持ち交流 孤立感を軽減

認知症を専門とする岡山大病院精神科神経科の竹之下慎太郎助教によると、認知症の発症や悪化のリスクには社会からの孤立が大きく影響するといひ、「VRでも実際の動物でも、利用者が感情を持って交流することで孤立感が減り、認知症予防や症状の悪化軽減に効果が期待できる可能性がある」と話す。

実際に、介護ロボットと介護利用者が交流するケースでは、ストレス軽減などにつながったという研究成果もでていているという。

また、VRであれば、介護する側の負担を軽減するだけでなく、介護パフォーマンスも一定の質が担保できるとし、「現場、介護利用者の双方にメリットがあるのでは」と期待する。

「お利口さん」「お座りなせ」で9月、VRゴーグルを装着した入居者が、仮想空間に再現されたシバ犬やボメラ・アンと触れ合っていた。

約40人が入居する同施設では、レメディ・アンド・カンパニー（東京都千代田区）が開発した「いつでもワンちゃん」を8月から本格導入し、週に1回レクリエーションを実施。体験を終えた福井慶信さん(87)は「ボールを持って帰ってきてくれるのがうれしい」と笑顔を見せた。

施設の担当スタッフ尾形駿介さん(29)は「入居者の一体感が生まれ、体験直後だけでなく『昔、うい犬を飼っていたんだよね』といった普段の話題にもつながった」と話し、コミュニケーションの深まりを実感しているという。

さらに、グラウンドゴルフ

こんな反応をされるんだろう」と思っていたことが、少し実感できた」といった声が寄せられた。

県長寿社会課の安井誠一課長は「認知症は座学だけでは伝わりにくい症状だが、VRによる疑似体験を通して実感を持って理解できる。これからはVRなどを活用しながら効果的な取り組みを推進し、認知症になっても希望を持って自分らしく暮らし続けることができる共生社会の実現を目指していく」と話している。